

社会的孤立と共食に関する研究

1240494 橋本悠香

指導教員 上村浩

研究背景

近年、日本では社会的孤立が大きな社会問題となっており、特に若者の孤立が注目されている。若者の孤立は、自殺や精神的な健康問題、さらには経済的な困難と深く結びついており、対応を怠れば深刻な状況を招きかねない。とりわけバーチャルコミュニティの拡大が対面でのコミュニケーションの機会を減少させ、若者の孤立感を強めているという指南もある。こうした現状を受け、本研究では若者の社会的孤立について、特に「食を通じた家庭内コミュニケーション」に焦点を当てて検討する。

研究目的

本研究では、幼少期の家庭における共食の質が、コミュニケーションの質に影響するのかを明らかにすることを目的とした。

研究方法

本研究では2024年11月に高知工科大学の学部生（経済・経営系学群：2年生から4年生までの男女）、83名を対象にアンケート調査を実施した。

分析結果

幼少期の食事環境において家族との対面コミュニケーションが頻繁に行われる環境にある場合、これが後のコミュニケーション能力に影響する可能性が高いことが示された。

考察・結論

家庭内での食事環境の質を向上させることが、子供の社会的スキルの発達や精神的健康の維持に寄与すると考えられる。このような「共食」をキーワードとしたマネジメントは近年多くの場面で見られるようになった。例えば日本リテイルシステム株式会社では、カフェ風オフィスを導入しており、社員間のコミュニケーション、ひいては情報共有の場として活用している。核家族化や共働きが進む現在、家庭内において共食の場を維持することは困難になりつつある。このような現状からも、今後は学校や職場、ひいては地域をも含め、多様な人々を含んだ「共食」の場を形成することが必要になる。